

姨捨説話の検討

―異文化交流の観点から―

工藤 茂

日本の文学を縦に流れている姨捨説話に、外来種の説話と在来種の説話とがあることは周知のことである。ここではその外来種の説話について、外国のそれと比較検討をしてみたい。

1 孝子伝をめぐって

『今昔物語集』巻第九「震旦付孝養」に「震旦厚谷、謀父止不孝語第卅五」という説話が見えている。短い内容なので次に日本古典文学大系の本文からその全文を引用してみよう。

今ハ昔、震旦ノ〔 〕代ニ厚谷ト云フ人有リケリ、楚ノ人也。其ノ父、不孝ニシテ父ノ遅ク死スル事ヲ常ニ厭フ。然ル間、厚谷ガ父、一ノ輿ヲ造リテ、老タル父ヲ乗セテ、此ノ厚谷ト共ニ此レヲ荷テ、深キ山ノ中ニ将テ行キテ、父ヲ弃置テ家ニ返ヌ。其ノ時ニ、厚谷、此ノ祖父ヲ乗セタリツル輿ヲ家ニ持返タリ。父、此レヲ見テ厚谷ニ云ク、「汝チ、何ノ故ニ、其ノ輿ヲ持返ルゾ」ト。厚谷、答テ云ク、「人ノ子ハ、老タル父ヲバ輿ニ乗セテ山ニ弃ツル者也ケリト知ヌ。然レバ、我が父ヲモ老ナム時ニ、此ノ

輿ニ乗セテ山ニ弃テム。亦、更ラニ輿ヲ造ラムヨリハ」ト。

父、此レヲ聞テ、「然ラバ、我モ老ナム時、必ズ被弃レナムズ」ト思テ、怖レ迷テ、即チ、山ニ行テ父ヲ迎テ將返ニケリ。其ノ後ハ、厚谷ガ父、老父ニ孝養スル事不愚ズ。此レ、偏ニ、厚谷ガ謀ニ依テ也。

然レバ、世孝テ、厚谷ヲ誉メ感ズル事无限シ。祖父ノ命ヲ助ケ、父ニ孝養ヲ令至ムル、此ヲ賢キ人ト可云シトナム語り伝ヘタルトヤ。

この説話は中国（の楚の国の人）の話として書き留められている。つまり、中国から日本に入ってきた話である。いつごろ入ったものか不明であるが、『万葉集』巻第十六の三七九一番歌、竹取翁の歌の最後に「古の賢しき人も 後の世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち帰りけり」という箇所があつて、それがこの話を指すものだとすれば、それ以前に伝播されたと考えることができる。

澤瀉久孝の『萬葉集注釋』巻第十六（昭59・中央公論社）には、そこに契沖の代匠記と西野貞治の論文「竹取翁歌と孝子傳原穀説話」が

引用されており、孝子伝の原文が掲げられている。それを引用して見よう。

孝孫原谷者楚人也、其父不孝、常厭父之不_レ死、時父作_レ輦入_レ父、與_レ原谷共擔、棄_レ置山中、還_レ家、原谷走還、齎_レ來載_レ祖父_レ輦_レ呵_レ噴云、何故其持來耶、原谷答云、人子老父棄_レ山者也、我父老時入_レ之將_レ棄、不_レ能_レ更作_レ、爰父思惟之、更還將_レ祖父_レ歸_レ家、還為_レ孝子、惟孝孫原谷之方便也、與_レ世聞之、善哉、原谷救_レ祖父_レ之命_レ、又救_レ父之二世罪苦_レ、可_レ謂_レ賢人_レ而已_レ（今、京大本となつてゐる舟橋家本）

要約すると以下のようなだろうか。

孝行な孫の原谷は楚の人である。その父は不孝で、父の死なぬことを常に厭うていた。ある時父は輦を作り、父を入れて原谷と二人で山中に捨てに行った。父が家に還つた後、原谷は山から輦を持ち還つた。父は何故輦を持ち帰つたのかと、原谷を叱つた。そこで原谷は、次のように答えた。人の子は老父を山に捨てる者だと知りました。私も父が老いた時、この輦を使って山に捨てましょう。そうすれば、新しく輦を作らなくて済みます。それを聞いた父は山に捨てた老父を家に連れて帰つた。世間の人々は言った。原谷は賢い人だ。祖父の命を救い、その上、父の二世の罪苦までを救つた、と。

『今昔物語集』（日本古典文学大系）の校注は、山田孝雄、忠雄、英雄、俊雄が担当している。その頭注に、「震旦厚谷、謀父止不孝語第卅五」の八出典は船橋本孝子伝巻上6。類話は、陽明本孝子伝に見えるほか、沙石集巻第三4・私聚百因縁集第六10にも見えるとある。こ

の頭注に従えば、私が先に引用した孝子伝がその出典にあたる。この孝子伝は『中国学芸大事典』（昭和58・大修館書店）によると、平安時代以降鎌倉時代を通じて行われたとある。が、万葉集の例を見ると、その渡来はさらに古かつたと思われる。

さて、孝子伝では老父を乗せたものを「輦」とする（注1）が、万葉集では「車」とし、今昔物語では「輿」とする。鎌倉時代に成立した住信の『私聚百因縁集』巻第六（十）「原谷ノ事。孝祖父事。」と無住の『沙石集』巻第三（六）「小兒ノ忠言事」もそれを「輿」とする。「輦」と「輿」とは人が担ぐものであるから大きな違いはない。しかし、「車」は人や牛あるいは馬が引くものであるから、老父を乗せたものを「車」とする万葉集と、それを「輦」や「輿」とする他の説話との違いは大きい。万葉集は、あるいは孝子伝以外の他の孝子説話によつていたのであろうか。

万葉集に賢人の名は見えない。が、他の説話集にははっきり記されている。この孝孫の名前にもそれぞれ相違がある。先に引用した舟橋家本と陽明文庫本の孝子伝、及び私聚百因縁集では「原谷」、契沖が代匠記に引用している孝子伝では「原穀」、敦煌出土の句道輿撰搜神記では「元覺」、今昔物語では「厚谷」、沙石集では「元啓」となっている。「原谷」と「原穀」は発音が同じで共に「[yuan gu]」と発音されるから、その名前に大きな違いはないといつてよからう。「元覺」についてはどうかという点、「元」の発音は「[yuan]」で、「原」のそれと同じである。しかし、「覺」は「[gaku]」の読みと違つて「[kaku]」と発音される。ところが、「穀」によく似た字に「穀」（一対の玉の意）（注2）という

漢字があつて、この字は「覺」と同じ発音である。従つて「穀」を「穀」に写し間違えたり、読み違えた場合のことを考えると、これも大きな違いとはならないと考える。同様に、今昔物語の「厚谷」の場合はその字の形から判断して、「厚」は「原」の写し間違いと見ることが容易なので、これも大きな違いにはならない、と私は考える。問題は沙石集の場合である。「元啓」の「元」については、先に述べた通り「原」と同じ読みなので問題はない。だが、「啓」はこれまで述べてきた字の発音と違つて「[き]」と読む。このことについてはどのように判断すべきなのであろうか。あるいは、今昔物語とはその出典を異にするのであろうか。日本古典文学大系の『沙石集』の頭注によると、米沢本の『沙石集』の本文には「源谷元啓ト云二人ノ子」とあるというから、日本において伝承される過程において変容したと見るべきなのかもしれない。ちなみに、「源谷」の読みは「[Yuan gu]」で「原谷」や「原穀」のそれと全く同じである。

沙石集の当該説話には、実は孝子伝や他の説話集の当該説話と違う二つの点がある。その一つは「父、妻が言ニ付テ、年タケタル親ヲ山ニ捨テムトス」というところ。妻が年老いた父を嫌つて夫に捨てさせる話は、「父」を「姨」に置き換えて、『大和物語』第百五十六段、『今昔物語集』卷第三十本朝付雑事「信濃国夷母弃山語第九」等に、日本の信濃国姨捨山の話として伝えられていた。従つて、この箇所の変容は外国から入つてきた説話の日本化を示すものと考えられる。もう一つは、元啓が山中で父に輿を持って還ると言い、父の反問に答えて「父ノ老タラム時、又持テステムズル為ナリ」と言つて、父を改心させる

ところ。それ以前の資料では、この部分は父が家に帰つてしまい、孝孫が輿や輦を家まで持ち還つて父を改心させることになつていた。

この説話が口承文芸では次のように変容して語られてきた。

昔はな、年寄りになつち、なんもでけんこつなるとなあ、年寄りを畚(ふご)に入れち山へふて、行く時代があつたんと。これもそんな時代ん話じゃけんど、あるところへな婆さんがあつたんと。そしたら婆さんの子供と孫が、婆さんを畚ん入れち、山へふてに行きよつたんと。そしたら婆さんは畚ん中から、草を丸めちや道に投げ投げするんと。そんじやきなあ子供ん人が「かかさんかかさん、何しよるんな」ちたずんねたんと。そしたら「こりやなあ、お前たちが帰るとき道を間違うちやいかんき、目印をおいぢよくんじや」ちいうち、まさりやそんま山に行つちふてたんと。そしたら孫になる人が「お父つつあんお父つつあん、こん畚持つち帰ろうえ」「どうしちそげんこというな、もうこれや要らんじやねえな」ちいうたんと。そしたら、お父つつあんも「ああこりや己れが悪かつた、年寄りをふてるとまた自分もふてられんらん」ち思うち、また年寄り婆さんを連れて帰つち大事にしたと(注3) 関敬吾の『日本昔話大成』9(昭和54・角川書店)によると、この昔話は鹿児島から青森県まで分布している。捨てられる者がこの昔話のように婆さんになつてゐるのもあれば、爺さんになつてゐるものもある。爺と婆の二人になつてゐるものもある。また、沙石集の説話のように、嫁が夫をそのかして捨てさせる昔話もある。が、この昔話で注目したいのは、捨てられる者が山に行く道々で自分を捨てる子のた

めに、道標をする話が混在していることである。この葉（枝折）型の昔話を日本に古くから伝えられてきた在来種の親棄山だとしたのは、柳田国男であった（注4）。その説に従えば、外来の孝孫原谷の説話は、時間の経過の中で以上のように変容し、日本化して来たと言うことが出来るのではあるまいか。

なお、この口承文芸は中国は勿論のこと、朝鮮にも分布している（注5）。いや、そればかりではない。閑敬吾の『日本の昔話』（昭和52・日本放送出版協会）によると、「畚」を「カーペット」に替えて国際目錄タイプに入っているというから、世界に広く分布していたのである。ただ、日本に入ってきたのは既に検討して来たように、中国からであったと言っているまいか。

2 雑宝蔵経の難題

『今昔物語集』巻第五「天竺付仏前」に、「七十余人流遣他国国語第卅二」という次のような説話が載っている。

今昔、天竺二十七人余流人ヲ他国ニ流遣ル国ケリ。其国一人ノ大臣有リ、老イタル母ヲ相具セリ。朝暮ニ母ヲ見テ孝養スル事无限シ。如此クシテ過ル間ダニ、此ノ母、既ニ七十二余リヌ。朝ニ見テタニ不見ヌソラ尚不審サ難堪シ。何況ヤ、遙ナル国ニ流遣テ永ク不見ザラム事、更ニ可堪キニ非ズト思ヒテ、子ノ大臣、蜜ニ土ノ室ヲ堀テ家ノ角ニ隠シ居ヘツ。家ノ人ソラ此レヲ不知ズ、況ヤ、世ノ人知事无シ。

以下引用を続けると長くなるので、必要な部分だけを引用することにして要約しよう。

このようにして年が経つうちに隣国から三つの難題を課せられた。この難題に答えないと七日の間に国を攻め滅ぼすという。その難題は次の三題であった。

一、△同様ナル牝馬二疋ヲ遣セテ▽△此ノ二疋ガ祖子ヲ定メテ可注遣シ▽

二、△同様ニ削タル木ノ漆塗タルヲ遣テ▽△此ガ本未定メヨ▽

三、△象ヲ遣テ此ノ象ノ重サノ員計ヘテ奉レ▽

国王は困って大臣に相談をする。大臣は家に帰って隠して置いた母に尋ねる。母は若い時に聞いたことがあると言って、その答（注6）をことごとく教えてくれた。国王は大臣から教えられた通りに、隣国に解答する。そのお陰で国は無事であった。

その後、国王は大臣にどうしてこの難題を解くことができたかを尋ねる。大臣はその一部始終を国王に申し上げる。国王はどうしてこの国には昔から棄老の習慣があったのだろうかと言ひ、それを廃止して老人たちを全て呼び戻した。△其ノ後、国ノ政平カニ成リテ民穩カニシテ国ノ内豊カ也ケリトナム語り伝ヘタルトヤ▽とこの説話は終わる。インドの話として『今昔物語集』に収められているこの説話の典故は、『日本古典文学大系』の頭注によると△雑宝蔵経第一4棄老国縁▽だという。そこにはまた△法苑珠林卷第四十九、不孝篇第五十、棄父部第四にも引く▽と書かれている。

『雑宝蔵経』とは『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会）によると、

△元魏吉迦夜、曇曜共訳。仏及び諸弟子を始め、其の他、仏滅以後の諸種の事縁を雑集採録せるもの▽だという。『法苑珠林』は同じ辞典に△唐道世撰▽△広く内外の典籍を引用解説し、捜査の便に供したるもの▽とある。事実『法苑珠林』を見ると、その当該篇の冒頭に△如雜宝藏經▽とあって、その内容は雜宝藏經と全く同じである。従ってここでは、『法苑珠林』には触れず、『雜宝藏經』の第一4「棄老国縁」

(注7)を対象にして検討を加えていつて見たい。

仏が舍衛国で以下のように語った。今では年老いた者を大事にしているが、過去久遠の昔、棄老という国があつて、老人を遠くへ捨てていた。その国に一人の大臣がいた。孝順の心深く、年老いた父を捨てることができなかつた。そこで、深く地を掘って密屋を作り、父を入れて孝養を尽くしていた。

その頃、天神が後述する九つの難題をその国の王に出して、もしもそれに答えることが出来なければ、七日の後、汝の身と国とを悉く覆滅する(注8)と言つた。王は懊悩し群臣と議るが誰にもその答が分からない。そこで大臣は家に帰り、密屋に隠して置いた父に相談をした。すると、父は其の難題をことごとく解決してくれた。王は、大臣からその答を聞き、天神にその通りに答た。天神は歡喜して王に沢山の財宝を与え、汝の国土を外敵の侵害から守つてやろうと言つた。これを聞いて王は大いに喜び、大臣に、自分で知つていたのか、誰かに聞いたのかと尋ねる。そこで大臣はそのいきさつを全て話す。こうして棄老国は、それ以降、老人を大切にす国になつたのだという。この話は仏が最後に次のように言つたと記されて終わる。

△爾時父者。我身是也。爾時臣者。舍利弗是。爾時王者。阿闍世是。爾時天神。阿難是也。▽つまり、この時の「父」は私、「大臣」は舍利弗、「王」は阿闍世、「天神」は阿難だつた(注9)、と。

この時に天神の出した九つの難題と、その解答を次に掲げよう。

一、(問)爾時天神。捉持二蛇。著王殿上。而作是言。若別雄雌。汝国得安。

(意訳。以下同じ。天神が二匹の蛇を王殿に置き雄と雌の判別が出来たら、お前の国は安全だ、と言う。)

(答)以細軟物。停蛇著上。其躁擾者。当知是雄。住不動者。当知是雌。

(細くて軟らかいものを蛇の上につけ、いらだつて騒ぐ方が雄で、動かずにじつとしてゐる方が雌である。)

二、(問)天神復問言。誰於睡者。名之為覺。誰於覺者。名之為睡。

(睡者(まだ悟りを得ない人のことか)では誰を覺者と言ひ、覺者(梵語ブツダの漢訳で悟つた人のこと)では誰を睡者と言ふのか。)

(答)此名学人。於諸凡夫。名為覺者。於諸羅漢。名之為睡。

(それは学人である。諸凡夫にあつてはこれを覺者とし、諸羅漢にあつては睡者とする。)

三、(問)天神又復問言。此大白象。有幾斤兩。

(この大きな白い象の重さ(体重)はいかほどか。)

(答) 置象船上。著大池中。画水齐。船深淺幾許。即以此船。量石著中。水没齐画。則知斤兩。

(船に象を乗せて大きな池に浮かべ、喫水線に印をつける。次にこの船に石を積み、印をつけた所まで船を沈めた後、その石を計れば象の重さが分かる。)

四、(問) (天神又復問言。) 以一掬水。多於大海。

(ひと掬いの水が大海より多いとは?)

(答) 若有人能信心清淨。以一掬水。施於仏僧及以父母困厄病人。以此功德。数千万劫。受福無窮。海水極多。不過一劫。推此言之。一掬之水。百千万倍。多於大海。

(信心が篤く心の清浄な人がいて、ひと掬いの水を仏僧や父母、困っている病人に施したならば、この功德を以て数千万劫、福を受けて窮まるどころがない。海水は極めて多い。が、一劫に過ぎない。このことから推し測つて言うと、ひと掬いの水は百千万倍、大海より多いことになる。)

五、(問) (天神復化作「餓人」。連骸拄骨。而來問言。) 世頗有人飢窮瘦苦劇於我不。

(天神が餓えた人に身をやつし、連骸(からだ)を骨で支えた姿で現れて)、世の中に自分よりも飢え窮まり、瘦せて苦しむことの甚だしい者はいるか、いないか、と聞いた。)

(答) 世間有人。慳貪嫉妬。不信三宝。不能供養父母師長。將來之世。墮餓鬼中。百千万歳。不聞水穀之名。身如太

山。腹如大谷。咽如細針。髮如錐刀。纏身至脚。挙動之時。支節火然。如此之人。劇汝飢苦。百千万倍。

(世の中には、そういう人がいる。慳貪(けちで欲ばり)で嫉妬深く、仏教を信ぜず、父母や師長を供養出来ない者は、将来の世、餓鬼道に墮ち、百千万年、水や穀物(食物)の名前を聞くこともなく、身は太山のように、腹は大きい谷のように、咽は細い針のようになり、髪は錐のように鋭利になって身に纏い付き足にまで届く。動く時には体の関節が火と燃える。このような人は、おまえの飢えの苦しみよりも甚だしいこと、百千万倍である。)

六、(問) (天神又復化作二人。手脚扭械。項復著鎖。身中火出。拳体焦爛。而又問言。) 世頗有人苦劇我不。

(天神がまた、手かせ足かせをされ、首にも鎖を付けられ、体中から火が出て全身焦げただれた人間に姿を変えて現れ)、自分よりも苦しみの甚だしい者がこの世にいるかどうか、と尋ねた。)

(答) 世間有人。不孝父母。逆害師長。叛於夫主。誹謗三尊。將來之世。墮於地獄。刀山劍樹。火車烜炭。陷河沸屎。刀道火道。如是衆苦。無量無辺。不可計數。以此方之。劇汝困苦。百千万倍。

(そういう人が世の中にはいる。父母に不孝で、師長に逆らつてこれを害し、夫や主に背き、三尊を誹謗する。こういう者は

将来の世地獄に墮ち、刀の山や剣の樹へ追いやられ、地獄に行く者を迎えに来るといふ燃えている車に炬の炭のように乗せられ、あるいは、屎(くそ)の沸騰する河に陥ったり、刀の道や火の道を歩かせられる。このような多くの苦しみが数限りなく、数えることも出来ない。これを以て比べてみると、おまえの困苦より甚だしいことは百千万倍である。)

七、(問) (天神又化作二女人。端政環璋。踰於世人。而又問言。)

世間頗有端政之人如我者不。

(天神がまた、ずば抜けて端正で、すぐれて立派な女性に姿を変えて現れ)、世の中に自分のように端正な人はいるかどうかと尋ねた。)

(答) 世間有レ人。信敬三宝。孝順父母。好施忍辱精進持戒。得生天上。端政殊特。過於汝身。百千万倍。以此方之。如瞎獼猴。

(世の中にはそういう人がいる。仏教を信じ敬い、父母に順つて孝を尽くし、施すことを好み、よく忍耐精進して戒を守り行えば、天上に生まれることが出来て、その端正なことはおまえの身の百千万倍である。それと比べると、おまえの扮している姿は片目の大猿だ。)

八、(問) (天神又以二真檀木方正正等。又復問言。何者。是頭。

(天神が一本の、四角で真直ぐな真檀(まゆみ)の、両端とも同じ大きさの木を以て)、どちらが頭かと尋ねた。)

(答) 擲著水中。根者必沈。尾者必浮。
(水中に投げ入れると、根の方は必ず沈み、先(尾)の方は必ず上がる。)

九、(問) (天神又以二白驃馬形色無異。而復問言。誰母誰子。

(天神が二匹の、姿も色も全く同じ、白い牝馬を以て)、どちらが母で、どちらが子かと聞いた。)

(答) 与草令食。若是母者。必推草与子。

(草を与えて食べさせてみる。もしも母馬だったならば、必ず草を子馬の方に押しやって子に食べさせる。)

これを今昔物語の難題と比較してみると、今昔物語の第一の難題は右の九のそれ、第二の難題は八のそれに、そして、第三の難題は三のそれにほぼ同じである。違っているのは、第一の難題の二匹の牝馬の草の扱い方と、第二の難題の木に漆が塗ってあるかないかということだけだ。難題以外での相違は、隠して養っていたのが今昔物語では「母」であるのに、雑宝蔵経では「父」となっていることくらいであろう。しかし、この相違は他の嫉捨説話でも父と母の両者があるので、必ずしも大きな相違とは言えない。この相違よりもむしろ大事なのは、難題が解けなかった場合、「七日ノ内ニ」国を亡ぼすという今昔物語の日数と、雑宝蔵経のそれが同じ「七日」であるということである。この日数の一致に、私は雑宝蔵経の棄老説話を今昔物語の祖形と考える根拠を求めることが可能だと見る。そういう意味において雑宝蔵経の話、今昔物語の当該説話の出典とする日本古典文学大系『今昔物語

集』の頭注には信憑性がある。従って、この説話は遠い過去に、インドから中国を経由して日本に入ってきたものだ、と言うことができる。そして、それが日本の昔話となって沖繩から青森まで広く分布していたのである。その間にその難題が多様に変容していったのであった。

3 昔話の難題

昔は七十歳以上の年寄りには山に捨てるというきまりがあった。ある村に一人の親孝行の若者があった。その親がもう七十歳になり、いよいよ山に捨てることになった。だがこの若者はたいへん親孝行者であったから、山まで負っていったがかわいそうになつてまた連れもどつて、家の納戸に隠しておいた。そのころ村に、ほかの村から幾つかの難題を出されて、村の長を非常に困らせた。それで村の長は、ある日村じゅうの人を集めて、その難題を答えたいものには欲しいものは何でもやることにした。第一の問題は、牧場の馬のすぎ(兄)馬とうとう馬とを見分けるにはどうすればよいかということであった。若者はさつそく家に帰つて親にたずねた。親はすぐに親馬を先に引つ張つて歩かせると、すぐ後からついてくるのがうとうとう馬で、一番後からついてくるのがすぎ馬だと教えた。二番目の問題は、むとう(根)ともすら(先)ともわからない木のむとう、すらを見分けるにはどうすればよいかということだった。また親にたずねると、こもり(水たまり)に浮かすと、むとうは沈み、すらは浮かぶと教えた。三番目は灰

繩をなうにはどうすればよいかということであった。これも親に聞くと、繩をまるく輪にして焼くとそのまま残ると教えた。四番目の問題は法螺貝の口からしりに穴を通すにはどうすればよいかという問題であった。これも、蟻を糸で結わえて法螺貝のしりに砂糖を塗つておくと、蟻が穴をあけると教えた。若者は四つの難題を完全に答えることができ、村の長からたいへんほめられ、自分で考えたのではなからう、だから教えられたのかと問われた。はじめはいうのをこぼんだが、ついに親を納戸に隠している和白状した。それからは年寄りには大切であるからというので捨てないようになった。(注10)

これは鹿児島県大島郡で語られていた昔話で、関敬吾が『日本昔話大成』において「五二三A 親棄山」に分類した、難題型の親捨て山の昔話である。その内容から見て、前節で述べた、インドから中国経由で日本に入ってきた説話の昔話化であることは、一目瞭然であろう。だが、その難題を見ると雑宝蔵経のそれとは随分趣を異にしていることが分かる。第一番目の問題と第二番目の問題は雑宝蔵経の難題のパリエーションであるが、第三番目の問題と第四番目の問題は雑宝蔵経には見受けられなかった難題である。そこで、雑宝蔵経の難題を検討してみると、先に列挙した九つの難題のうち二、四、五、六、七の難題は、日本の説話や昔話には受容されていなかったことが明らかに示ってくる。これらの難題は、いずれも仏教の専門的な理念や内容を示すもので、日本の民衆には馴染まなかつたからであろうか。あるいは説経の材料としてあまり面白くなく、その効果もあまり期待出来ない

と判断して捨てたせいであろうか。今昔物語の編者もこれを敬遠して分かりやすい三つの難題しか取り入れていない。

そこで今度は逆に、先に引用した昔話の第三番目と第四番目の難問のように、日本の説話や昔話にはあつて雑宝蔵経には見られない難題を挙げてみよう。

1、灰繩をなうにはどうすればいいか。(灰繩千束)

2、法螺貝(七曲の玉、管、螺、榮螺)の口から尻に糸(緒、穴)

を通す方法。(蟻通し)

(勾玉に灰繩を通す法)

3、色と形と同じ木札二枚の雌木と雄木の判別。

4、打たぬに鳴る太鼓。

5、一束の藁を十六束にせよ。

6、一升の豆を明日は二升にしてこい。

7、ひゅうひゅう笛の袖かぶり。

8、瓢箪の中に紙をはって漆を塗り、金粉を振ること。

9、鳥の羽に書いた手紙を読む。

10、針を池に浮かべること。

11、一年草で千尋のものを持って来い。

右の難題は、昔話の中では老人の知恵によって、以下のように解決される。

1、繩を塩水に付けた後に、乾かして燃やす。

2、穴の向こう側に蜜を付け、蟻に糸を付けてこちら側から入れて

通す。(または、穴をあける。)

(勾玉に縫い糸を通しておいて焼く。)

3、盥の水に木札を入れると、雌木は上に浮かぶが、雄木は少しでも沈む。

4、太鼓の中に黄金虫を入れる。紙の太鼓に蜂を入れる。

5、にわ(土間)に入つて鉄、これで十二束。私の所に老人がいるが年寄りのしわ(四束)からこうした知恵が出る。

6、豆を水に浸して置けば増える。

7、紙太鼓に蜂を入れて持つていく。太鼓を破るとみな口笛して、袖を被つて逃げる。

8、紙を糊と煮て瓢箪の中に入れて漆を入れて金粉をかける。

9、飯を煮た上にのせて読む。

10、千本の針に固め油を塗れば池に浮かぶ。

11、蔦蔓を千尋差し出す。

右の1はいかにも日本的な難題である。ところが関敬吾によると、紀元前二〇〇〇年代のパピロニアのアヒカール伝説に、「砂で繩をなう」という話があつて、そのバリエーションと考えられるという。従つて、この難題もまた外国種のものであつた。安易にこれは在来種と考えるのは危険なことなのだ。

2の難題は、『今昔物語集』より早く成立したであろう清少納言の『枕草子』に書き留められている。日本古典文学大系本『枕草子』の二四四段は、蟻通し明神の縁起の書かれている段である。そこには三つの難題があつて、木の本末、蛇の雌雄の判別という雑宝蔵経と同じ難題の他に、雑宝蔵経にはなかつた八七曲にわだかまりたる玉の、中通り

て左右に口あきたるが、ちひさきを奉りて、「これに緒通して賜はらん。
 (この国にみなし侍る事なり)」▽という難題があった。このことにつ
 いては、既に拙稿「蟻通明神のこと一、二」で考察しているので詳し
 くは触れないが、この難題は中国が起源ではないかと考えられる。そ
 れが日本に伝わって、『枕草子』、『俊頼口伝集』、『神道集』、『奈良絵本』
 を貫流し、その一方で昔話の難題に継承されて日本化しながら現代に
 至るまで語り継がれていたのであった。

3の難題は、雑宝蔵経の一、二蛇の雌雄の判別と、八、木の末末の
 判別が混合した上で日本化したような難題である。それ以外の難題は、
 この説話の日本化の過程において変化していったものと思われる。
 ところで、モンゴルの口承文芸を集めた『オールドス口碑集』(注11)
 にも似た話が収められていて、そこには次のような二つの難題が書き
 留められている。

(1) ラバのような形をした二匹の大きな動物である。人の姿を
 見れば、体がふくれてますます大きくなる。

(2) 本・末の見わけられないように同じにこしらえて、塗料を
 ぬってしまった、大梁のような太い木。

これを見分けよ、というのである。(2)は、すぐ雑宝蔵経の八の難
 題と同じであることが分かるが、(1)は中国またはモンゴルのもので
 ある(注12)。孝行な息子が大きな深い穴を掘って隠して置いた父に
 聞くと、父は次のように話してくれる。

△その大きな動物は、まさに外国のネズミの悪魔だ。お前さん、歩
 きまわって、八斤以上九斤に達する猫を一匹手に入れて、袖のなかに

おさめて、その動物のそばへ行つて、その(猫の)頭を袖の口からの
 ぞかせて見せなさい。それがネズミの悪魔にちがいないならば、猫を
 見るや体が小さくなるだろう。もしも小さくなつたらば、猫を放しな
 さい。▽

猫を連れて行って父のいった通りにすると、その動物はちぢみにち
 ぢんでネズミになり、放した猫に食われてしまった。

この口承文芸は、インドから中国を経てモンゴルに入ったと考えら
 れるが、難題の一つはほぼそのまま伝えられ、もう一つは中国または
 モンゴルにおいて変容し、以上のような難題になったものであろう。
 このネズミを見分ける難題は、日本の昔話には見られないものであつ
 た。

実はこの外来種の昔話には、難題ばかりではなく、別な在来の話も
 混在している。それは枝折型の昔話である。その点では、1節で述べ
 た親棄養型と同じ変化を見せていたと言つてよからう。このようにし
 て、外国から伝来された説話が、日本在来のそれと混合し日本化しな
 がら、日本の姨捨文学の一面を担っていたのである。

△注▽

(1) 孝子伝の本文は澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第十六(昭59・中央
 公論社)に引用されているそれを引用した。なお、「輿」という字
 は孝子伝(陽明文庫本)、今昔物語、私聚百因縁集では「輿」とな
 っているが、全て「輿」の字に統一した。

(2) 『中日大辞典 増補版』(一九八六年四月・大修館書店)による。

(3) 『日本昔話大成』9 (昭和54・角川書店) に大分県直入郡の昔話として掲載されている。分類は「五二三C 親棄翁」。

(4) 『定本柳田国男集』第二十一卷 (昭37・筑摩書房) に収められているエッセイ「親棄山」による。

(5) 『日本昔話大成』9 (昭和54・角川書店) 「五二三C 親棄翁」の項による。

(6) その答は以下の通りである。

一、同様ナル馬ノ祖子ヲ定ムルニハ二ノ馬ノ中ニ草ヲ置テ可見シ。

進テ起テ食ヲバ子ト知り、任セテノドカニ食ヲバ祖ト可知ベシ。

二、水ニ浮ベテ見ルニ、少シ沈方ヲ本ト可知ベシ。

三、象ヲ船ニ乗セテ水ニ浮ベツ。沈ム程ノ水際ニ墨ヲ書テ注ヲ付

ツ。其ノ後、象ヲ下シツ。次ニ船ニ石ヲ拾ヒ入レツ。象ノ乗テ

書ツル墨ノ本ニ水至ル。其ノ時ニ石ヲ量リニ懸ツ、其ノ後チ

ニ石ノ数ヲ惣テ計タル数ヲ以テ象ノ重サニ当テ、象ノ重サハ幾

ク有ルト云フ事ハ可知キ也。

(7) 雑宝藏経、法苑珠林、いずれも本文は『大正原版「大藏経」』(新文豊出版公司影印) から引用した。

(8) この「若」不別者。汝身及国。七日之後。悉当覆滅。Vというところの傍線部分は、今昔物語の「七日の内に国を亡さむ」という日数と同じである。

(9) 須藤隆仙『仏教用語事典』(一九九三・新人物往来社) によるとこれらの人物は次のような者たちである。

「舍利弗」(しゃりほつ) 梵名シャーリプトラ (舍利の子の意)。

釈迦十大弟子中の長老。マガダ国王舎城北のバラモン家に生まれた。母がシャーリ (舍利) なのでこの名がある。父名はウパテイシユヤ (憂波提舎)。

「阿闍世」(あじゃせ) 梵名アジャータシャトル。釈尊在世中のマガダ国王。父王を獄死させ、母も幽閉した。後に懺悔して仏教に帰依した。

「阿難」(あなん) 阿難陀。梵名アーナンダ。釈尊の従弟で十大弟子の一人。

(10) 関敬吾『日本昔話大成』9 (昭和54・角川書店) から引用した。

(11) A・モスタートル著、磯野富士子訳『オールドスロ碑集』モンゴルの民間伝承 (東洋文庫59・平凡社)。

(12) 中国からの留学生陳達君が、山東省泰安で育ったおばあさんから、子供の時に以下のような昔話を聞いたと語ってくれた。

敵国から一つの大きな動物が送られてきた。あまり大きいので、一キロ先からでもはっきり見えた。敵国の難問は、その国の勇士が一人ずつ、一か月間この動物と戦い、勝つことができたならば国を攻めない。できなかったら国を侵略する、というものだった。それからの一か月間、たくさんさんの勇士がこの動物と闘い敗れて食われてしまった。最後の一日、一人の少年がこの動物との戦いを申し込んだ。少年は動物の入っている檻の中に入って、袖から一匹の猫を取り出した。猫を見るやいなや、その動物はおとなしくなり少しも動かなくなった。実はこの動物はねずみの妖怪だった。その後は難題型の話と同じで、少年は王から沢山の褒美を貰い、

棄老の命令は取り消されたという。